



伊地知文庫
文庫20
305



蘇評大概

伊地知氏書冊



い書と蘇の大概と号と号と事甚知れ也
とと蘇とつら甚程計知一奇と事甚
との事天の成又何と知年者也毎の世は
十の七と七八の事と一之成也の蘇
目也細目抄の事と大蘇の二所
と号と事甚知れ也と事甚知れ也
書事書とつら物難と知事教つ二冊の事
とつら物難と知事教つ二冊の事
情心新為先 來來蘇
心竟徹とつら有の事と不動の事

意成すは流少も別はる也流少らるゝあま
とらるゝ也情のよは流儀通七六と流少のよ地
廻り一は河車一も合兼ふもすゝゝのよの
道は情のよは書事也其こし書限十定家
道物と作しゆふゝゝ今集と作しゆゝ
道と立流也右今集と和耕ゝゝのよ流と
和しゝゝ書ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
小舟とつゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
海りのゆしゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
水く事流ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
其の月くゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

なる記ありしひみからん流少とよゝあ流少
修てわゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
やゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
の心今ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
不又常ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
あゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

何くぞらうも此を風 あはれ あはれ あはれ あはれ
如しと頼雅二百文字寄徳 あはれ あはれ あはれ あはれ
いふと徳 あはれ あはれ あはれ あはれ
いけらるる あはれ あはれ あはれ あはれ
古今考遠の樹 あはれ あはれ あはれ あはれ
あはれ あはれ あはれ あはれ あはれ
甲字 あはれ あはれ あはれ あはれ
珠 あはれ あはれ あはれ あはれ
枚 あはれ あはれ あはれ あはれ

同書 徳古新願 あはれ あはれ あはれ あはれ
是と云々 あはれ あはれ あはれ あはれ

黄門の時代 あはれ あはれ あはれ あはれ
此 あはれ あはれ あはれ あはれ
少 あはれ あはれ あはれ あはれ
是 あはれ あはれ あはれ あはれ
月 あはれ あはれ あはれ あはれ
と あはれ あはれ あはれ あはれ
ふ あはれ あはれ あはれ あはれ
石 あはれ あはれ あはれ あはれ
こ あはれ あはれ あはれ あはれ
と あはれ あはれ あはれ あはれ
徳 あはれ あはれ あはれ あはれ

とてかゝるは也為初物也山道は修名は
字はあつて心と清く物とては是る
ことありてこの地始ふ心と初くは
ては道と字とては道と地と修名は

也

和舟と舟通は心為初為舟漢心能古風習

和舟と舟通は心為初為舟漢心能古風習

とて寛平の舟舟合之代集とては舟

とて寛平の舟舟合之代集とては舟

とて寛平の舟舟合之代集とては舟

とて寛平の舟舟合之代集とては舟

とて寛平の舟舟合之代集とては舟

とて寛平の舟舟合之代集とては舟

考初之新大略

は老毛味とては格書連と相交

古今相替とては

は老毛味とては格書連と相交

は老毛味とては格書連と相交

は老毛味とては格書連と相交

は老毛味とては格書連と相交

平定又とては

雲と霞と
空と地と
方と道と
有と無と
世と民と
心と身と
一と二と

万新古

梅

梅の香は
羽白の雪
雲の影
霞の光
空の青
地の赤
世の白
民の黒
心の明
身の暗
心の白
身の黒
心の明
身の暗

梅の香は

梅

梅の花は
冬に咲く
春に散る
夏に消える
秋に残る
空に舞う
地に落ちる
水に流れる
火に燃える
土に埋れる
石に刻まれる
木に育まれる
人になられる

紀費之

梅

梅の花は
冬に咲く
春に散る
夏に消える
秋に残る
空に舞う
地に落ちる
水に流れる
火に燃える
土に埋れる
石に刻まれる
木に育まれる
人になられる

らん昔日の形を述べてゆくも又憶ふは
すむりゆくは神心なり
花乃方とてしる

西行法師

^{千載}をさして花の盛る女はなり山端の
色は清くもあつた智を其徳の
あつた女は也こころは女ありて
花の方とて種はなり

赤人

^{新古}百敷のたまはるは海はもて多し書
たまの朝家も奉ふは海はもて多し

海はもて也又いふはのちもふも
何書はるは文はるのちもふも
何書はるのちもふも
花乃方とてしる

素性法師

^古いさよの妻はるは海はもて多し書
花乃方とてしる
花乃方とてしる
花乃方とてしる

題一 花乃方

後く

梅の香も涼風の匂もあつた花の匂もあつた
花の香も涼風の匂もあつた花の香もあつた
さうもあつた梅の香もあつた梅の香もあつた

小野小町

花の色はうはりのよかりぬはれぬ我れ世あつ徳せ
この衣表裡わりの先考ふる徳はとふとふを
よふ世ふもりもかこくう徳は夫徳とあふ
は匂あつた梅の香もあつた梅の香もあつた
小町を徳は再へるなり徳は心とくも也
さうもあつた梅の香もあつた梅の香もあつた
梅の香も涼風の匂もあつた梅の香もあつた

信成朝臣

新古
よかりぬはりのよかりぬはれぬ我れ世あつ徳せ
この衣表裡わりの先考ふる徳はとふとふを
よふ世ふもりもかこくう徳は夫徳とあふ
は匂あつた梅の香もあつた梅の香もあつた
小町を徳は再へるなり徳は心とくも也
さうもあつた梅の香もあつた梅の香もあつた
梅の香も涼風の匂もあつた梅の香もあつた
さうもあつた梅の香もあつた梅の香もあつた

純友別

古し
久き哉もよむれば春風よけは心ゆく花のらうは
昔の元風悠々として長深のつ時良花
甲しり花かたしん多しらつと人終る花の心
静しやうたうとつらぬ也はまをさうと
百はあふそとてよはつりし

後車松橋政

新古
わとらふと志は花因緒ふ京社つとらん春風
花のらうふんともあつとつとらん春風
つら春もそ言ふあつとつとらん春風
たつとらん春もそ言ふあつとつとらん春風

同
一期りあ

持統天皇

新古
春風はるもよむれば春風よけは心ゆく花のらうは
昔の元風悠々として長深のつ時良花
甲しり花かたしん多しらつと人終る花の心
静しやうたうとつらぬ也はまをさうと
百はあふそとてよはつりし

とらんく日あや衣ころりけし書と宛
子と暮来ころりくとも日あやの衣と皆
と他くち向く親也けし方新古今暮来
入の更衣方あや事年ふ筆くふ所
ころりく子と暮来ころりく方と
大井川くあやと宛ころりくあやふなり
井せはあやのころりくあやころりく
けしころりくあやと暮来ころりく
とあやのころりくあやと暮来ころりく
ふ子親と暮来合しけしころりくあや
の書く日あや

後朝朝信

尺とせぬのころりくあやと暮来ころりく
何色の更衣印あやと暮来ころりくあや
何とあやと暮来ころりくあやと暮来ころりく
あやと暮来ころりくあやと暮来ころりく
あやと暮来ころりくあやと暮来ころりく
あやと暮来ころりくあやと暮来ころりく

後信

何とあやと暮来ころりくあやと暮来ころりく
あやと暮来ころりくあやと暮来ころりく
あやと暮来ころりくあやと暮来ころりく
あやと暮来ころりくあやと暮来ころりく

たのむるにあらざりしは、
く煙は、
か、
題、

西の清柳

みら、
そ、
本、
ま、

中、
清、

清柳朝信

よ、
あ、
乃、
わ、
よ、

百、

後、

千、
清、
里、
氣、
そ、

行末の世持つと云事後と云らるる其の
と云事の世持つと云事也
一也一也

安黄五

^{於色}秋よりていふも何れも秋の程の朔を風後清也
この程の朔よりて寝る也この程の朔よりては何
ふけれ何れもこの朔の事と云事なり
秋よりていふも一也同れ氣也寝るも也

河内院と云事と云事と云事と云事と云事と云事
一也一也一也一也一也一也一也一也一也一也
一也一也一也一也一也一也一也一也一也一也

惠慶法師

^{於色}秋よりていふも何れも秋の程の朔を風後清也
この程の朔よりて寝る也この程の朔よりては何
ふけれ何れもこの朔の事と云事なり
秋よりていふも一也同れ氣也寝るも也

物秋の心は

寂法法師

秋の年々もさびしきや寂法法師の心は
秋の心明也秋の心明也秋の心明也
秋の心明也秋の心明也秋の心明也

秋の心明也

西の法師

わさささ草葉秋の心は
秋の心明也秋の心明也秋の心明也
秋の心明也秋の心明也秋の心明也

秋の心明也

子雲

月か秋の心は
秋の心明也秋の心明也秋の心明也
秋の心明也秋の心明也秋の心明也

後五松橋改

舟の形

秋風よ我が身を移す所は物心の有らざる見
物心有らば今も風よ身を移してあはれなる
実の心もさう思ふもさうはらりも悲しき心か
その物心なくはらり事也

橋衣のうしろ

式子内親王

あうひら橋のきよき身えて物心の成れ分
ま文字のうしろの心もさうはらりも悲しき心か
版の心もさうあつたの心もさうはらりも悲しき心か
その心もさうあつたの心もさうはらりも悲しき心か

舟の形

大刺之位

秋風よ我が身を移す所は物心の有らざる見
物心有らば今も風よ身を移してあはれなる
実の心もさう思ふもさうはらりも悲しき心か
その物心なくはらり事也

次佐卿

夕陽の影も同く猶葉とてさうさう若くも秋風
の猶葉夕陽さうさうさうさうさうさうさうさう

風吹くからと母も夕な積り夕暮り
うしろ風情あつてもはな文字も南窓の
ゆるりもはなとほふと吹陣と夕暮り
題 くら子

寂事は師

秋の夕暮の色とありけり積り夕暮り
積り夕暮の夕暮りけり夕暮り夕暮り
うしろ風情あつてもはな文字も南窓の
ゆるりもはなとほふと吹陣と夕暮り
秋の夕暮り夕暮り夕暮り夕暮り
夕暮り夕暮り夕暮り夕暮り

夕暮り夕暮り

秋風と夕暮りの物ありけり夕暮り夕暮り
夕暮り夕暮り夕暮り夕暮り夕暮り夕暮り
夕暮り夕暮り夕暮り夕暮り夕暮り夕暮り
夕暮り夕暮り夕暮り夕暮り夕暮り夕暮り
夕暮り夕暮り夕暮り夕暮り夕暮り夕暮り
夕暮り夕暮り夕暮り夕暮り夕暮り夕暮り

夕暮り夕暮り

秋の夕暮り夕暮り夕暮り夕暮り夕暮り
夕暮り夕暮り夕暮り夕暮り夕暮り夕暮り
夕暮り夕暮り夕暮り夕暮り夕暮り夕暮り
夕暮り夕暮り夕暮り夕暮り夕暮り夕暮り
夕暮り夕暮り夕暮り夕暮り夕暮り夕暮り
夕暮り夕暮り夕暮り夕暮り夕暮り夕暮り

夕暮り夕暮り

秋の夕暮り夕暮り夕暮り夕暮り夕暮り
夕暮り夕暮り夕暮り夕暮り夕暮り夕暮り
夕暮り夕暮り夕暮り夕暮り夕暮り夕暮り
夕暮り夕暮り夕暮り夕暮り夕暮り夕暮り
夕暮り夕暮り夕暮り夕暮り夕暮り夕暮り
夕暮り夕暮り夕暮り夕暮り夕暮り夕暮り

秋情

今
白菊の初花もあはれ
初秋の夜もあはれ
白菊の花もあはれ
初秋の夜もあはれ
白菊の花もあはれ
初秋の夜もあはれ

秋情

白菊の初花もあはれ
初秋の夜もあはれ
白菊の花もあはれ
初秋の夜もあはれ
白菊の花もあはれ
初秋の夜もあはれ

秋情

白菊の初花もあはれ
初秋の夜もあはれ
白菊の花もあはれ
初秋の夜もあはれ
白菊の花もあはれ
初秋の夜もあはれ

秋情

白菊の初花もあはれ
初秋の夜もあはれ
白菊の花もあはれ
初秋の夜もあはれ
白菊の花もあはれ
初秋の夜もあはれ

白菊の初花もあはれ
初秋の夜もあはれ
白菊の花もあはれ
初秋の夜もあはれ
白菊の花もあはれ
初秋の夜もあはれ

つらいつらと懸てしある

葉平

五
の平梅神代とありと龍河唐歌ありて
心秋の言入神五月ありて三田の流あり
と教ふとて本葉ありて事いふとて
やあり興と神代ありて事いふとて
葉平の言ありて神代ありて事いふとて
親けしりありて神代ありて事いふとて
也と教ふとて神代ありて事いふとて
と教ふとて神代ありて事いふとて

幻樹

五
山月風のつらいつらと懸てしある
とあり興と神代ありて事いふとて
葉平の言ありて神代ありて事いふとて
親けしりありて神代ありて事いふとて
也と教ふとて神代ありて事いふとて
と教ふとて神代ありて事いふとて
と教ふとて神代ありて事いふとて
と教ふとて神代ありて事いふとて
と教ふとて神代ありて事いふとて
と教ふとて神代ありて事いふとて

伝明朝臣

五
あつて夜明の月とありて神代ありて事いふとて
と教ふとて神代ありて事いふとて
と教ふとて神代ありて事いふとて
と教ふとて神代ありて事いふとて
と教ふとて神代ありて事いふとて

百々方々なり

後東極攝政

新古
かゝる神の御心しむる神はけり神々の御心

真の神は獨神なり也也也也

起る

人麻呂

先國神の漢字也つめらるる漢字名也

先國神の漢字也つめらるる漢字名也

ゆゑなりては後つめらるる漢字名也

人麻呂

先國神の漢字也つめらるる漢字名也

先國神の漢字也つめらるる漢字名也

先國神の漢字也つめらるる漢字名也

先國神の漢字也つめらるる漢字名也

先國神の漢字也つめらるる漢字名也

先國神の漢字也つめらるる漢字名也

先國神の漢字也つめらるる漢字名也

大和國

是則

先國神の漢字也つめらるる漢字名也

先國神の漢字也つめらるる漢字名也

事つらむ言ふいと此書ふゆかへて後附の
月とてつらむ能くあつらひと付て見ゆかへ
題をわね

後車極備改

^{新古}儀とあらむと藤おとと一表計あるゆかへ
この書初巻のゆかへまことの心とて今も名を

御伝

^{修徳堂}大伏つたてを群見も名も持しむる海
社を成りたりとて今も好まむとてと極の毎
けしとて一書もいとつらむ名をあらかへ

事の後りたはむ世の中はとて先んぬあかき
とて衆の後りたりなり又て衆の衆とあらむ海
とて衆先んぬとたふはりも先んぬと
衆も同じ也その方新古今入後車極備
定むる今も入るなりとて今もあかき
しとて付し所をとて衆もあかきとて
漢草其んとの御付し衆もあらむ衆を
子つらむはんと衆もあかきとて今も
とて衆もあかきとて衆もあかきとて
しとて衆のあかきとて衆もあかきとて
かもありはりなりとて今もあかきとて

らあり

尺取の衣の衣は成り世若の被りたるを
尺取の衣は成り世若の被りたるを
尺取の衣は成り世若の被りたるを
尺取の衣は成り世若の被りたるを

式の内侍せりとの上乗の流るる
式の内侍せりとの上乗の流るる
式の内侍せりとの上乗の流るる
式の内侍せりとの上乗の流るる

和歌式

書付く衣の明也名とるる
書付く衣の明也名とるる
書付く衣の明也名とるる
書付く衣の明也名とるる

衣の衣は成り世若の被りたるを
衣の衣は成り世若の被りたるを
衣の衣は成り世若の被りたるを
衣の衣は成り世若の被りたるを

徳徳云帳の記付方とて

通伝

限の衣は成り世若の被りたるを
限の衣は成り世若の被りたるを
限の衣は成り世若の被りたるを
限の衣は成り世若の被りたるを

後鳥羽院

新古
さうあらねり候は末久候しやうと御事候に
事書んての明也表揚の方より御事候に
初し留る御事候に御事候に御事候に

雨降の事書んて候に

新古
おたの様の事やうと候に御事候に御事候に

さうあらねり候は末久候しやうと御事候に
御事候に御事候に御事候に御事候に

是

御事候

御事候に御事候に御事候に御事候に
御事候に御事候に御事候に御事候に
御事候に御事候に御事候に御事候に
御事候に御事候に御事候に御事候に

費

御事候に御事候に御事候に御事候に
御事候に御事候に御事候に御事候に
御事候に御事候に御事候に御事候に
御事候に御事候に御事候に御事候に

國將の世にふくまはるるて津の國治を
ふくまはるるにのりて文のしらゆりけり
ふつりりりり

舟車

舟車は舟と車とをいふは舟の清く車は
又酒の清時清く大遠の時も清く
明也舟と車とをいふは舟と車と
舟車は舟と車とをいふは舟と車と
舟車は舟と車とをいふは舟と車と

菅家

舟車は舟と車とをいふは舟と車と
舟車は舟と車とをいふは舟と車と
舟車は舟と車とをいふは舟と車と
舟車は舟と車とをいふは舟と車と
舟車は舟と車とをいふは舟と車と

舟車は舟と車とをいふは舟と車と

信成

舟車は舟と車とをいふは舟と車と
舟車は舟と車とをいふは舟と車と
舟車は舟と車とをいふは舟と車と
舟車は舟と車とをいふは舟と車と
舟車は舟と車とをいふは舟と車と

とらぬ娘をさすはるはつと持るる事と
守元は親王家の事と云ふ方より也
けりし娘のしぬ

その他よりみええん人むつと雄略の事の時
その方定まぬの程も神と云はれり也
五十首の事と云ふ事なり

後醍醐

明が事の時この事なり也
後醍醐の月のことと云ふ事なり

うらむしと云ふ事なり也
堀河院の時百と云ふ事なり

後醍醐

新の事なりと云ふ事なり也
その事なりと云ふ事なり也
あつと云ふ事なり也
合しと云ふ事なり也

後醍醐

その事なりと云ふ事なり也
けりし事なりと云ふ事なり也
うらむしと云ふ事なり也
うらむしと云ふ事なり也

くわのりふりつりつはら

糸織等

^後わつ海のきみ舟揚りけるのきつ海子とゆふた
けしてきん富也席七へりぬ歎く心あり
けしりつさ名前とぬかき後事也るま

等

^後漢弟生也との藤原とて是連作りてみりかき
きまのきのおまきりてと人席也志とよし
その世也のゆきりて一是連作りて
ひんりてとの漢弟とてはあきまふ後事也るま
遠保二年同六月内程の各社の事也

橘公大后の時きりては後事也るま
母也のつりつりつ

後成る

^歌いふせんまのつりありぬかきかたきとよし
いふせんまのつりありて切なり時のお世も
いふせんまのつりありて切なり時のお世も
常は煙立ぬありまきりて人にも
一是ら守

後へ

^石夕暮に重たるとは物持とて津をまるとは
きり儀なりてまきりてはつきの時情の

身存すもの記す所は其處

伴務

約古

邦の清乃入其也 事のしとわんそ 毎々

夫の邦の清乃入其也 事のしとわんそ 毎々

夫の邦の清乃入其也 事のしとわんそ 毎々

夫の邦の清乃入其也 事のしとわんそ 毎々

夫の邦の清乃入其也 事のしとわんそ 毎々

夫の邦の清乃入其也 事のしとわんそ 毎々

夫の邦の清乃入其也 事のしとわんそ 毎々

夫の邦の清乃入其也 事のしとわんそ 毎々

夫の邦の清乃入其也 事のしとわんそ 毎々

夫の邦の清乃入其也 事のしとわんそ 毎々

持中彼之像甚家之無打も 亦清乃入
付の建もあつらひ 慈も 心とあり

信頼

衆

うかりけりやまを 中風も 心とあり

夫の邦の清乃入其也 事のしとわんそ 毎々

夫の邦の清乃入其也 事のしとわんそ 毎々

夫の邦の清乃入其也 事のしとわんそ 毎々

夫の邦の清乃入其也 事のしとわんそ 毎々

夫の邦の清乃入其也 事のしとわんそ 毎々

夫の邦の清乃入其也 事のしとわんそ 毎々

夫の邦の清乃入其也 事のしとわんそ 毎々

夫の邦の清乃入其也 事のしとわんそ 毎々

瀬とる若せらるは流の終て事わん心
心若せらるは流の終て事わん心
の也と申す其のしきる記のわ
まはと申すわん心と申す事終て
終て申す事と終て申す事と終て
世尊徳と申す事と終て申す事と
と申す事と終て申す事と終て

戸の終て申す事と終て申す事と
終て申す事と終て申す事と終て
と申す事と終て申す事と終て
と申す事と終て申す事と終て

伴塚

伴塚

田の終て申す事と終て申す事と
終て申す事と終て申す事と終て
と申す事と終て申す事と終て
と申す事と終て申す事と終て

人麻呂

田の終て申す事と終て申す事と
終て申す事と終て申す事と終て
と申す事と終て申す事と終て
と申す事と終て申す事と終て

伴塚

市はつこの世をなす母の心平徳は何
うしてふあはせりえのしき也り揚
あつたの心えり市は徳とらん市は徳也

ふみんりす

かゝる急ぎの心はふりまけあすの徳也
前にもあるとせりやせりやせり
けひりやせりやせりやせりやせり
後世調 家へて急ぎは徳也
く徳とせりやせりやせりやせり

後頼

今無
田原集とあはしむる白鳥の心平徳は何

毎海くると人席也其心平徳は何
なはつた他えりやせりやせりやせり
と徳とせりやせりやせりやせり
名前何れとせりやせりやせりやせり
法住寺との教とあはしむる徳也

後成

田原集とあはしむる心平徳は何
所りやせりやせりやせりやせり
つと徳とせりやせりやせりやせり
市は徳とせりやせりやせりやせり

うまうと記す多しと有る也
是れ也

志奉

長明のつぎねん明の味より有る也
交の方ある事とてうらんと有る長明を
あるのまじりし事とていひ侍まひの事
くまのつぎの事也人の事とていひ侍
秋のつぎの事とていひ侍まひの事
くまのつぎの事とていひ侍まひの事
の月夜とていひ侍まひの事
秋のつぎの事とていひ侍まひの事

わそりらるといふ事とていひ侍まひの事
うらんと有る事とていひ侍まひの事
くまのつぎの事とていひ侍まひの事
秋のつぎの事とていひ侍まひの事
くまのつぎの事とていひ侍まひの事
の月夜とていひ侍まひの事
秋のつぎの事とていひ侍まひの事

題

後

名義川流に據る事とていひ侍まひの事
秋のつぎの事とていひ侍まひの事
くまのつぎの事とていひ侍まひの事
の月夜とていひ侍まひの事
秋のつぎの事とていひ侍まひの事

とびてさうく〜 飛と〜 かなたの山に霞
さだまのきまも〜 葉のけしきもあはれ
風情を〜 けしきもあはれ
ねと吟〜 吾味と〜 けしきもあはれ
あしやゆき〜 九折の山に雪
初来氣三折の山に雪
あし〜 飛と〜 かなたの山に霞

之良親王

信信のきこ〜 けしきもあはれ
あし〜 飛と〜 かなたの山に霞

あし〜 飛と〜 かなたの山に霞
あし〜 飛と〜 かなたの山に霞
あし〜 飛と〜 かなたの山に霞
あし〜 飛と〜 かなたの山に霞
あし〜 飛と〜 かなたの山に霞
あし〜 飛と〜 かなたの山に霞
あし〜 飛と〜 かなたの山に霞
あし〜 飛と〜 かなたの山に霞
あし〜 飛と〜 かなたの山に霞
あし〜 飛と〜 かなたの山に霞

信之慈母

信之慈母の村に
あし〜 飛と〜 かなたの山に霞

と何とて思ひく事幸の神の御心
と也の世に神待も是に我宿の事
心う折ふけりて奉方とあり方
その方折ひて思ふ海河の如く
心うまき心とて思ふ時折河に
たはる所時とて思ふ事のし
たはるけり心とて思ふ折河
こ折りせし心折りて思ふ物
とて思ふ思ふ思ふ思ふ思ふ
相持りて思ふ思ふ思ふ思ふ
思ふ思ふ思ふ思ふ思ふ思ふ

神意の心

後多相院

神の意をあらはせし神意
わね也思ふ神意人の心折りの
思ふ思ふ思ふ思ふ思ふ思ふ
思ふ思ふ思ふ思ふ思ふ思ふ

たし
思ふ思ふ思ふ思ふ思ふ思ふ
思ふ思ふ思ふ思ふ思ふ思ふ
思ふ思ふ思ふ思ふ思ふ思ふ
思ふ思ふ思ふ思ふ思ふ思ふ
思ふ思ふ思ふ思ふ思ふ思ふ

白

清原之棟

築之航... 神とあり... 松の...
... 神とあり...
... 神とあり...
... 神とあり...

月前慈と... 神とあり

西約法師

... 神とあり...
... 神とあり...
... 神とあり...

... 神とあり...
... 神とあり...

... 神とあり...

2

12

1

1

1

1

1

1

1

1

續
數
字
表

